

東教育財団だより

発行所
公益財団法人
東教育財団
大阪市中央区南本町
2丁目2番11号
堺筋本町西尾ビル6階
電話06(6262)7363
発行責任者 沼田 宏



(評議員会会議風景)

東教育財団では、六月十四日に評議員会を開催し、平成三十年度事業報告及び決算を審議するとともに、同日付けで任期満了となる評議員、理事及び監事の選任替えを行いました。

評議員の選任替え

評議員会が財団の重要事項の決議機関であることから、その構成員である評議員(定数十三〜十五名以内)は、東地区の連合町会の会長及び各種団体の東地区代表者で構成し、その任期は四年である。

再任 (連合町会長)

- 川上 潤 (愛日)
 - 濱口 幸太郎 (久宝)
 - 西口 佳克 (汎愛)
 - 大喜田 一夫 (浪華)
 - 森田 芳充 (北大江)
 - 加藤 正二 (中大江西)
 - 三木 啓二 (南大江西)
 - 日ノ下 盛弘 (玉造)
- (団体代表者)**
- 石井 恵子 (女性団体)
 - 石中 清香 (スポーツ推進委員)
 - 兼重 義浩 (青少年指導員)

新任 (連合町会長)



中野 雅司 (中大江西)

(団体代表者)



芦田 順子 (老人クラブ)



藤溪 英純 (保護司会)

退任

計 十四名

五十嵐 茂 (連合町会長) 再任辞退

石井 好男 (老人クラブ) 再任辞退

應田 俊子 (保護司会) 再任辞退
〔年齢制限にかかる内規〕に該当

理事の選任替え

理事会が業務執行の決定権限を有し、理事の職務の執行を監督する

ことから、理事(定数八〜十名以内)は、東地区五地域の代表者五名と有識者五名で構成し、その任期は二年である。

再任 (地域代表者)

- 富樫 龍健 (集英)
- 梅本 憲史 (中大江)
- 清水 隆司 (玉造)
- 橋本 英男 (愛日)
- 伊藤 弘一郎 (南大江)

(有識者)

- 赤銅 久和 (学校教育)
- 黒田 光 (〃)
- 木口 剛一 (行政)
- 榎野 勝 (元行政)

新任 (有識者)



井谷 正美 (愛珠幼稚園園長) 計 十名

退任 (有識者)

- 新谷 忠子 (共励会) 再任辞退

監事の選任替え

監事（定数三名以内）は、その職務に関する有識者から選任し、その任期は二年である。

再任（有識者）

木下 修二 野上 俊二
長谷 隆雄
計 三名

理事長等の選定

理事等の選任替えを行った評議員会終了後、理事会が開催され、理事長、会計理事及び審査理事の選定が行われ、次のとおり決定した。

再任

理事長 榎野 勝
会計理事 富樫 龍健
審査理事 梅本 憲史

平成三十年度 事業報告及び決算

六月十四日に開催された評議員

会において、平成三十年度事業報告及び決算が承認されたが、その概要は次のとおりである。

◆ 事業報告

○ 学校教育事業助成

- 幼稚園 〈八件〉 四、五〇〇、〇〇〇円
- 小学校 〈七件〉 二、一〇〇、〇〇〇円
- 中学校 〈四件〉 一、二〇〇、〇〇〇円

○ 社会教育事業助成

- 社会教育 〈二〇件〉 三、四五〇、〇〇〇円
- 生涯学習 〈五件〉 二、九五〇、〇〇〇円
- 生涯学習 〈五件〉 五〇〇、〇〇〇円

○ 地域文化事業助成

- 地域文化 〈一八件〉 五、六〇〇、〇〇〇円
- まちづくり 〈一六件〉 三、六〇〇、〇〇〇円
- まちづくり 〈一六件〉 二、一〇〇、〇〇〇円

◆ 特定費用準備資金積立事業

日本近代教育制度の創始とされ

る学制は明治五（一八七二）年に発布されたので、令和四（二〇二二）年に百五十周年を迎える。そこで、その前後の期間（令和元（五年）に周年記念特別事業を行う中央区所在の公立の幼稚園、小学校及び中学校の助成需要に応ずるため資金を積立てる。

◆ 決算

○ 収入（経常収益計）

- 基本財産利息 三二、二七〇、二九三元
- 受取利息収益 六六円

○ 支出（経常費用計）

- 事業費計 二八、七四六、五四七円
- 支払助成金 一九、三三三、六五二円
- （その他） 一三、五五〇、〇〇〇円
- （その他） 五、八〇三、六五一円
- 管理費計 九、三九一、八九六円

○ 差引（当期経常増減）

二、五三三、八二二円

※ 特定費用準備資金二百六十万円を設定したので、収支相償は、七六、一八八円となり適合する。

助成事業の紹介

平成三十年度に助成した事業の具体例を紹介します。

学校教育事業助成

船場の伝統を

「社会に有為な人材育成」

開平小学校では、平成六年当時の教職員が編纂した『わが町船場』を活用して、地域学習の視点を採り入れた授業実践を行っている。

平成三十年度は、六年生のこれまでの「地域学習」を発展させ、「わが町船場ツアー・船場つ子ガイド」の実践を行った。

この取組により、開平小学校区には、まだまだ魅力ある歴史的施

設や誇りとすべき文化があり、最先端の情報や技術が集まる地域であり、これからも地域学習を継続・発展させていけることが確かめられた。

(助成額二十万円)



三月十四日開催の「船場ツアー」の様様

生涯学習事業助成

「南小学校生涯学習ルーム」



南小学校の四く六年生の希望児童がキッズダンスを練習し、『めっちゃWAKUWAKUダンス・ロイオンモール』で発表した。

また、南幼・小・中校種毎に読み聞かせボランティアによる『おはなし会』を開き、読書への関心を高めた。

(助成額十万円)

地域文化事業助成

谷町キッズ

「二〇一八体験型スクール」

NPO法人音楽文化芸術振興会では、中央区在住の小・中学生を対象に、発表という目標のもとに楽器演奏の練習を重ね、成果発表の演奏会に参加させることにより、協調性や達成感などを実感させるとともに、演奏や音楽の楽しさに加え、努力の大切さも体験させることができた。(助成額十五万円)



地域まちづくり事業助成

「中大江校下桜まつり茶会」



中大江校下社会福祉協議会では、中大江公園で満開に咲き誇る桜を楽しむながら、能や和太鼓も鑑賞できる「桜まつり」を開催し、同時に茶道家による野点のお点前披露や抹茶を楽しむ「お茶会」も催した。

このことにより、伝統芸能に親しみ、地域文化の向上を図り、併せて、住民と企業市民との交流・親睦を図った。(助成額十五万円)

大阪の町人魂

— 懐徳堂と適塾 —

大阪には町人や豪商が文化の担い手となり、パトロンとして文化を生み育んできた伝統がある。

江戸時代の高等教育を行う学校のほとんどは、幕府立か藩立、今でいう国立か公立であるが、大坂では町人たちが醸金しあつて学校をつくり、豪商が支援する。すなわち私塾であり、町人のための学校であつた。もつとも、大坂は幕府の直轄地であつたから、藩校がなかつたのは当然ともいえる。

大坂初の私塾は「含翠堂」である。平野郷の指導層であつた末吉・徳成・成安・土橋・三上などの七家が享保二(一七一七)年に、現在の大阪・平野区の地に創設したもので儒学を主に、国学・算術・医業などを教えた。設立当初は「老松堂」と称した。

享保九(一七二四)年には、中井齋庵が現在の中央区今橋に「懐徳堂」を開く。大坂町人の子弟にも儒教的

教養を身につけることができるよう創設されたものであり、後に、中井竹山・履軒らが継承・発展させ、富永仲基や山片蟠桃などを輩出した。



懐徳堂では主として朱子学を教えた。朱子学は、万物のあらゆることを何の先入観もなしに見て、一歩一歩段階を踏んで考えていけばわからないものはないとする合理的な考え方をする。したがつて、懐徳堂では、漢字を学ぶとともに、天文学・地理学・歴史学なども同時に学んでいた。

幕府が建てた「昌平黌」は、その規模と学問的水準の高さにおい

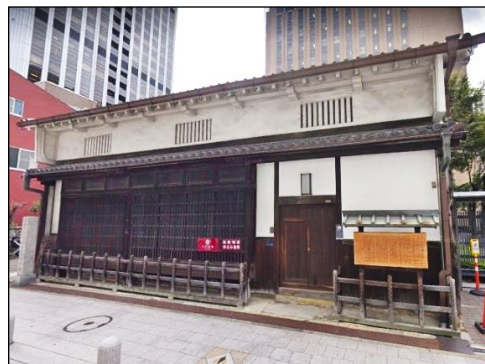
て有名であるが、幕府の正規の学問所として発足したのは寛政二(一七九〇)年と大坂より遅れている。また、昌平黌でも朱子学をやつていたが、純粹に中国の学問としてやつており、自然科学系の学問は何もやらなかつたという。

学ぶ分野の広い懐徳堂は、多くの人材を輩出しながら、明治二(一八六九)年まで約百五十年間も維持された。この持続力に町の人々の『文化を担う意思』をみる事ができる。『生涯学習』という言葉は欧米から入つたといわれるが、むしろそのルーツは大坂町人にあつたといふことができる。



(懐徳堂旧址碑) 日本生命本社ビル南壁面
さらに、天保九(一八三八)年

には、緒方洪庵が現在の中央区北浜に「適塾」を開設した。蘭学のメッカであり、わずか二十五年だったが、福沢諭吉や大村益次郎ら近代日本を背負つた人材を輩出した。



適塾の門人は、約六百人で全国に及んだが、地元大坂の門人は十九人に過ぎない。それは、適塾以前に懐徳堂が存在し、最先端の蘭学にも取り組んでいたからである。

(槇野 勝・記)

*このコラム欄への投稿を募ります。
テーマは「おおさか」です。一五〇〇字程度でお願いいたします。